

「新型コロナ騒動」とは何だったのか…？ “茶番”は終わったが、我々日本国民は「3年4ヵ月の失政」を絶対に忘れてはいけない

2023.6.5 中川淳一郎 現代ビジネス

「茶番」がようやく終わった日

5月8日、疎開先のタイ・バンコクから3ヵ月ぶりに日本に帰ってきて仰天した。コロナ対策に関する空気感がガラリと変わっていたからだ。

「疎開」は大袈裟な表現ではなく、もはやマスクとワクチンを強要する“内戦状態”にあった日本にいるのがツラ過ぎて、その両方を強要しない場所に逃げたかったのだ。

それまで専門家たちは散々「5類になってもウイルスの性質は変わらない」と言い続け、政府分科会の尾身茂会長は「まだ普通の病気ではない」と、なんとしてもコロナを終わらせたくない様子だった。しかし、政府は彼らの意見をスルーし、5類化すると公約を守った。

「ウイルスの性質は変わらない」は確かに正しいのだが、結局、「5類になったから人々の行動指標が変わった」だけであり、さらには「コロナに対する空気感が変わった」「メディアが飽きた」だけなのだ。

政府が「5月8日に感染症法上の2類相当から5類に変更する」と発表したとたん、この変化が起こったのである。そこで本稿では、「一体、この新型コロナウイルス騒動とは何だったのか」について分析してみたい。



結論としては、断じて「ヤバい感染症が3年4ヵ月の間猛威を振るった」ではなく、「連日浴びる“カンセンタイサク”という名のヤバい非科学的な“教義”の猛威に3年4ヵ月も晒された」だったのである。

その陰で儲かる者が多数出たが、一方で、普通の国民の中には、仕事を失う者もいた。そして、旅行へ行ったり、運動会をしたり、施設に面会に行ったり、イベントで大声で応援したりと、当たり前だったはずの日常を失った。そのうえで、“カンセンタイサク教”の教義を信仰する者と信仰しない者との間で激しい争いが起きた。

そして、5月8日、その教義は「政府による活動停止要請」により急速に力を失い、洗脳から解けた信者たちは、かつての日常に戻ろうとリハビリ期間に入り、いまだ信じる者だけがカルト化した。

悲しいことに、カルト化したマスク警察の残滓的な男連中が、女性や子供など反撃してこない人々を狙い、マスクをするよう恫喝する事件が相次いでいるという。

教義変更の大きなポイントは、マスク着用が任意であることが改めて強調されるほか、各

種施設での「新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点からマスクを着用し、アルコール消毒へのご協力をお願いします」というアナウンス・貼り紙がなくなったことだ。

JR東海のCMでも、従業員を含めマスクを外した笑顔の人々が登場するようになったし、マスクをしない客を追いかけまわした某百貨店も、シレッとマスク着用の貼り紙と門番を撤去するなど、企業活動もガラリと変わった。

また、これまで、マスクをしない者は、マスクの効果を絶対視する人々から「イヤならその施設へ行くな」「店が決めたルールに従え」「施設管理権があるからガタガタ言うな！」と批判されてきたわけだが、彼らは今度は「マスクをする自由がある！」と絶叫し始めた。

あなた方が3年以上も主張してきた言葉をそのままお返ししたい。施設が決めたルールには従え！

とにかく、この3年4ヵ月、「新型コロナウイルスの専門家」なんてものは世の中に一人もいなかったはずなのに、「感染症の専門家」が「新型コロナウイルスの専門家」としてまつりあげられ、彼らの提言に、ほぼ全国民が従わされたのである。

国ぐるみの「壮大なる管理実験」

この新型コロナウイルス騒動が一体何だったのかといえば、つまるところ、国ぐるみの「壮大なる管理実験」だった。それは、政府が行動指標と方針を決め、メディアが騒ぐことに飽きたら終わるものだった。要するに「茶番」である。

ツイッターユーザー「かすてら」氏はこう書いた。

〈一回目の緊急事態宣言の時、仕事で乗客が自分だけの総武線と山手線で電車通勤し続けた頃より、今の方が亡くなる人も、陽性者も多い…でも正常化した馬鹿馬鹿しさ、鬼畜米英！と言ってた連中が一夜にしてギブミーチョコレート！となった時と同じ気持ちだろう。〉

2021年・茨城県ひたちなか市の国営ひたち海浜公園で行われる予定だった『ロック・イン・ジャパンフェスティバル2021』は、茨城県医師会の要請により中止に。翌年から千



葉市蘇我スポーツ公園で開催されるようになった。すると、2022年から茨城県では、茨城放送が主催する「Lucky Fes」が開始された。

これには医師会も反発しない。なぜ2021年はダメで2022年はいいのか？ まったく整合性が取れない。なにしろ2021年よりも2022年の方が陽性者数は多かったのだから。厚労省のまとめをベースとした下のグラフを見れば一目瞭然である。

さて、本当に奇妙だったのが上記グラフを見ても分かるように、2020年、2021年の被害は少なかった。それでも緊急事態宣言とまん延防止等重点措置は頻繁に発出された。2022年2月以降は両方とも出されていない。

その時信者は「緊急事態宣言かマンボウを発出しないから増えたのだ！」と絶叫した。だが、出さないでも収束していくことについては「マスクをしてワクチンを打ったからだ！2つともやらなければもっと酷い状況になった！」と来る。信じるものにとって「人流抑制」「自粛」「会食禁止」「マスク」「ワクチン」というものは、否定されたくないものなのだ。

第8波では陽性者が多かったが、ピークを越えてなだらかに陽性者数が下がった2023年1月24日（※8万1585人。ちなみに5月8日は9310人）、政府が一つの発表をする。1月27日に、新型コロナが5月8日以降、5類となることを発表すると明言したのだ。なんと101日後の話である。

つまり政府は、コロナ騒動が茶番であるということ、政治案件であったこと、利権を調整する時間が必要だったことを分かっていたのだろう。

また、日本政府がもっとも配慮したかもしれないのが、「さすがに101日の移行期間があれば、恐怖におののく洗脳民も洗脳が解けるのでは……」という点である。

ちなみに、イギリスのジョンソン首相（当時）は2022年1月19日、8日後である27日から「プランB」（マスク義務や陰性証明提示）の撤回を発表し、実施した。日本人はイギリス人よりもかくも臆病だったのである。

カレンダーに付度してくれる奇妙なウイルス

そしてここから茶番性は迷走度合を深めていき、2月6日には、3月13日に「マスクは任意」となること

を政府が発表。3月17日、文科省は、4月1日からは学校でもマスクが不要になることを発表した。これらの日程に科学的な根拠はない。

3月13日については「施行まで1ヵ月以上あり、かつ月曜



日」程度の根拠を持った日程で、4月1日は「新年度開始」「春休み明けで教師も心の準備ができるだろう」ということだ。思えば緊急事態宣言やマンボウも毎度、「今から出します」ではなく、数日間の猶予を明かしたうえで、発出された。

全然緊急じゃないじゃないか！ まさに、カレンダーに付度してくれる奇妙なウイルスだったのである。

メディアはというと、3月13日や4月1日に「マスクを外さない人・外す人」の割合調査をしたり、AIカメラで着用者の割合を調べたり、マスクをしている人を探して、外さない理由を聞くなどした。

3月13日以降も外さなかった主な理由は、「恥ずかしい」「手抜きメイクに慣れた」「ヒゲをそらないでいい」「周りが外さないから着ける。外したら外す」「周りの目が気になるから着ける」であり、もはや感染対策でもなんでもない。

この頃は「花粉症が今年は苦しいんだよ！」とツイッターで逆ギレする人もいたが、環境省によると花粉症の有病者は2019年で42.5%（環境省「花粉症環境保健マニュアル2022」参照）。だが、花粉の飛散が終わっても42.5%以上がマスクをしている。

結局、3年4ヵ月もの間、自分が信じてきた教義を否定したくないだけか、上記のように感染対策とは全く違う理由でマスクを手放したくなかっただけなのである。

5月8日、福岡空港から地元・唐津に戻った時の感想は冒頭に書いた通り「空気感がガラリと変わっていた」だが、5月15日から23日まで東京へ行き、さらに驚いた。新宿・渋谷・六本木といった「ウェーイ！」な街でのマスク着用率は60～70%程度まで減っていたのである。

そして深夜の電車では目の前に座る8人全員がマスクをしていないなんてこともあった。こちら側も6人が着けていない。となると「花粉症説」も途端に胡散臭くなってくるし、これだけ多くの人が外すということは、次のようなことを意味するのではないか。

【1】かなりの割合は本当はマスクを外したがっていた

【2】かなりの割合は付度ないしは勤務先や利用施設の事実上の強制により着けていた

【3】他人が外せば自分も外す、と考えている人がかなりの割合でいた